

情報教育に対する大学新入生の意識は変化したのか： 2024・2025 年度新入生アンケート結果比較

中園 長新^{1),2)}

1) 麗澤大学 国際学部

2) 麗澤大学 情報・データサイエンス教育センター

nnakazon@reitaku-u.ac.jp

Has the Attitude of University Freshmen Toward Informatics Education Changed?: A Comparison of the Freshmen Questionnaire Results of the 2024 and 2025 Academic Years

Nagayoshi Nakazono^{1),2)}

1) Faculty of Global Studies, Reitaku University

2) Center for Information Technology and Data Science Education, Reitaku University

概要

高等学校学習指導要領改訂に伴い、2024 年度までの大学新入生と 2025 年度からの大多数の大学新入生は、高等学校で異なる教育課程を学んでいる。この制度改訂による変化を明らかにするため、2024 年度と 2025 年度の大学新入生を対象としたアンケート調査を実施し、回答者の情報教育に対する意識が変化したかどうかを考察した。調査の結果、情報概念の捉え方については年度ごとの大きな違いはなく、教育課程の違いによる影響は見られなかった。一方で、情報科で学んだ内容は「タイピング」が多くを占めた 2024 年度回答に対し、2025 年度回答では「プログラミング」の存在感が増した。しかし両年度ともオフィススイートの使い方に偏った回答が多くみられ、学習指導要領改訂後もスキル習得を中心とした授業が多く行なわれていることが示唆された。また、情報科の授業に対する意識はいずれの年度も低く、まずは情報科で学ぶことに対するモチベーションの向上が必要であると考えられる。

1 はじめに

1.1 研究の背景

高等学校の教育課程^{*1}は、2018（平成 30）年に改訂された学習指導要領（新課程）[1] が、2022（令和 4）年度入学生から学年進行で実施されている。2009（平成 21）年改訂の高等学校学習指導要領（旧課程）[2] で学んだ高校生の多くはすでに高校を卒業し、2024（令和 6）年度卒業生（2025 年 3 月卒業）の多くは、新課程で学んできた生徒となった^{*2}。

新課程では、高等学校共通教科情報科が、必修教科目「情報Ⅰ」と選択科目「情報Ⅱ」の積み上げ型に再編され、原則としてすべての高校生が「情報Ⅰ」を履

修することとなった。高等学校情報科の変遷や現状については澤田 [3] に詳しい。こうした変化を受けて大学入試センターは、2025（令和 7）年 1 月実施の大学入学共通テストから「情報」を出題教科に追加し、初年度は旧課程対応科目を含めて 302,493 人が受験した [4]。これは共通テスト全受験者の 65.5% に相当する。情報科は今や「受験教科」の一つとなり、参考書や問題集も多数出版されるようになった。少なくとも制度的な位置づけとしては、旧課程と新課程では情報科の存在感が大きく変容している。

情報科は高等学校における情報教育の要であり、小学校や中学校で断片的に学んできた情報教育を総括する存在である。情報科の変容はすなわち、高校生が学ぶ情報教育の変容を意味する。教育課程が変化し、情報教育が変容したのであれば、それらに基づいて学んできた高校生が身につけた資質・能力も、何らかの形で変容することが期待される。一方で、制度が変わっても学びの実態が変容しなければ、高校生の資質・能

^{*1} 本稿では便宜上、2009（平成 21）年改訂の高等学校学習指導要領に基づく教育課程を旧課程、2018（平成 30）年改訂の高等学校学習指導要領に基づく教育課程を新課程と表記する。

^{*2} 過年度生や、4 年制課程の高等学校の卒業生等は、旧課程で学んだ世代である。そのため、2024 年度卒業生の全員が新課程を履修しているわけではない。

力も従前と変わらないものになるであろう。高校生の実態を把握するためには、制度面を確認するだけでなく、学習者自身の学びの結果を調査する必要があると考えられる。

なお、高等学校における情報科の履修年次は定まっておらず、1～3 年次のいずれの学年においても履修することがあり得る。そのため、高等学校における情報教育が生徒にどのような資質・能力を身につけさせたのかを知るためには、卒業時または高校卒業後の進路において調査しなければならない。そこで本研究では、高等学校を卒業した後の大学新入生を対象とした調査を実施する。旧課程で学んだ世代である 2024 年度大学新入生と、大多数が新課程で学んだ世代である 2025 年度大学新入生を対象にアンケート調査を実施し、その結果を比較することを通して、教育課程の変化によって情報教育に対する大学新入生の意識がどのように変化したのかを分析し、明らかにする。

1.2 研究の目的と意義

本研究では、2009（平成 21）年改訂高等学校学習指導要領（旧課程）で学んできた 2024 年度大学新入生と、大多数が 2018（平成 30）年改訂高等学校学習指導要領（新課程）で学んできた 2025 年度大学新入生を対象として、情報教育に対する意識がどのように変容したか（あるいは変容していないか）を明らかにすることを目的とする。

本研究は、高等学校と大学の双方に対して意義を持つ。高等学校に対しては、新旧課程の卒業生が身につけた資質・能力を比較することを通して、各学校における情報教育の方向性を確認・再検討するための材料として機能することが期待される。大学に対しては、大学新入生の変容を把握することで、大学におけるこれまでの一般情報教育を見直し、学生の実態に合った教育を提供するための一助となることが期待される。

2 アンケート調査

本研究の目的を達成するため、アンケート調査を実施した。調査の実施対象・方法等について、本節で詳説する。なお、アンケート調査は 2024 年度大学新入生と 2025 年度大学新入生のそれぞれを対象として実施したが、前者の分析結果については本稿筆者により、大学 ICT 推進協議会（AXIES）2024 年度年次大会において発表済である [5]（以下、この発表を先行研究と呼ぶ）。本稿は、先行研究の結果だけでなく、新たに 2025 年度大学新入生を対象とした調査結果を加えて比較分析する点で、先行研究を発展させた別個の研究とし

て位置づけている。

本章で紹介するアンケート調査の方法・内容等は、2024・2025 年度いずれの調査でもほぼ同一であるため、重複する部分については先行研究 [5] の記述を引用しながら説明する。

2.1 調査の対象者

アンケート調査は、筆者が所属する麗澤大学（以下、「本学」と呼ぶ）の情報・データサイエンス系科目のひとつである「情報リテラシー A」*3 の 2024 年度および 2025 年度の受講生を対象として実施した。本学は外国語学部、国際学部、経済学部に加えて、2024 年度から経営学部と工学部を新設し、5 学部体制となった。この科目はすべての学部において 1 年次必修科目として位置づけられており、入学直後の第 1 クォータで複数クラスに分割して開講している。毎年若干名の再履修者が含まれるものの、全学部の 1 年生に悉皆調査を実施することが容易であるため、この科目の担当教員の協力を得て実施した。

2.2 調査の方法

アンケート調査は、Google フォームを用いたオンライン形式で実施した。回答の際は多重回答を避ける目的で Google アカウントへのログインを必須としたが、ログイン情報やメールアドレスは今回の分析では一切用いていない。また、アンケート回答結果は授業の成績に影響しないことを説明した上で回答を依頼した。

アンケートは第 1 回または第 2 回の授業で実施した。実施日は、2024 年度は 4 月 15～25 日、2025 年度は 4 月 14～24 日である。各年度のアンケート対象者数（授業の履修者数）*4 ならびに回答数、回答率は表 1 の通りであった。

表 1: アンケート調査の回答状況

	2024 年度	2025 年度
履修者数	850	1,053
回答数	641	755
回答率	75.4%	71.7%

2.3 調査の内容

アンケート調査では大きく分けて、次の 4 つの内容について調査した。1 つ目と 2 つ目は ICT 活用の実態

*3 2024 年度はカリキュラムの都合により「情報リテラシー」という名称で開講している学部もあるが、科目名称・内容の差異は今回の調査に影響を与えないため、本稿では「情報リテラシー A」という名称で統一して表記する。

*4 各年度とも再履修者が若干名ずつ含まれるため、各年度新入生の人数と科目履修者数は一致しない。

について調査する項目であり、3つ目と4つ目は情報教育に対する意識を調査する項目である。

- 利用している ICT 端末 (BYOD 端末^{*5}、タブレット端末、スマートフォン)
- 自宅のネットワーク環境
- 「情報」に対するイメージ
- 高等学校情報科の履修科目や学習内容

先行研究では ICT 活用の実態と情報教育に対する意識の両方を分析対象としたが、本稿は情報教育に対する大学新入生の意識変容に主眼を置いているため、ICT 活用の実態に関する質問項目は分析対象とせず、情報教育に対する意識 (3つ目と4つ目の内容) の変化を中心に分析・考察する。

3 アンケート調査の結果

本章では、2024 年度・2025 年度それぞれのアンケート調査の回答を整理する。2024 年度調査結果については先行研究と同じデータを用いているが、2025 年度データを分析するにあたって分析方法の共通化を図るため、2024 年度調査結果についても再分析を実施した。そのため分析結果の図等が、先行研究と異なっている部分がある。

3.1 高等学校で履修した情報科目

設問「高校で学習した「情報」の授業について、履修した科目名を教えてください。」に対する各年度の回答状況を表 2 に示す。この設問は、表に示す「その他」以外の項目を選択肢として与え、それに自由記述式の「その他」を加えた多肢選択式とした。履修科目は複数ある可能性があるため、この設問も複数回答可とし、回答ごとに回答数をカウントしている。そのため回答数の合計は各年度の回答者数を超えることがある。各項目については、各年度の回答者数に対する割合を括弧書きで示した。

なお、2024 年度は新課程履修者はまだ卒業していないため、「情報Ⅰ」および「情報Ⅱ」の選択肢は設定しなかった。また、履修したが科目名を覚えていないという項目については、2024 年度では設定していなかったが、回答にそのような記述が多く見られたことから 2025 年度からは選択肢として追加した。2024 年度の回答者のうち、科目名を覚えていなかった者については別の選択肢を無理矢理選択した可能性もあるため、

表 2: 高等学校で履修した情報科目 (複数回答)

	2024 年度	2025 年度
情報Ⅰ	-	582 (77.1%)
情報Ⅱ	-	55 (7.3%)
社会と情報	399 (62.2%)	7 (0.9%)
情報の科学	120 (18.7%)	1 (0.1%)
情報 A・B・C いずれか	58 (9.0%)	5 (0.7%)
情報産業と社会	12 (1.9%)	3 (0.4%)
科目名を覚えていない	※ 12 (1.9%)	116 (15.4%)
履修していない	59 (9.2%)	23 (3.0%)
海外出身等	18 (2.8%)	20 (2.6%)
その他	19 (3.0%)	24 (3.2%)

表中の「※」は参考値である。

表中の「その他」は、実際の回答では自由記述により科目名を回答してもらっている。「その他」に該当する科目としては、専門高校 (工業科や商業科等) で開設している専門科目や、学校設定科目と思われる科目名が大半を占めていた。

3.2 「情報」に対するイメージ

大学新入生に対し、「「情報」とはどんなものだと思いますか?」という問いかけに自由記述で回答してもらったものをテキストマイニングした結果を示す。回答結果はワードクラウドと共起ネットワークのそれぞれの手法で可視化を行った。なお、ワードクラウドは形態素解析エンジン MeCab^{*6}で分析した結果を、Python のプログラムでワードクラウドとして整形した。共起ネットワークは、テキストマイニングツールである KH Coder^{*7}を用いて作成した。

ワードクラウドを作成したところ、図 1 が得られた。問いかけ対象である「情報」を除くと、「データ」「知

^{*5} 本学では 2020 (令和 2) 年度入学生より、ノートパソコンの必携化を実施しており、この端末を BYOD 端末と呼んでいる。

^{*6} MeCab <https://taku910.github.io/mecab/>

^{*7} KH Coder <https://kncoder.net/>

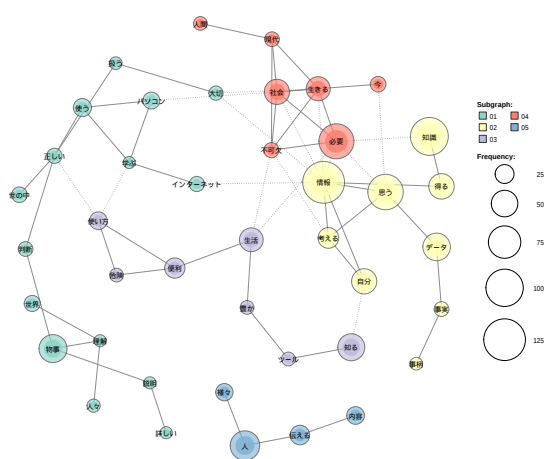


(a) 2024 年度

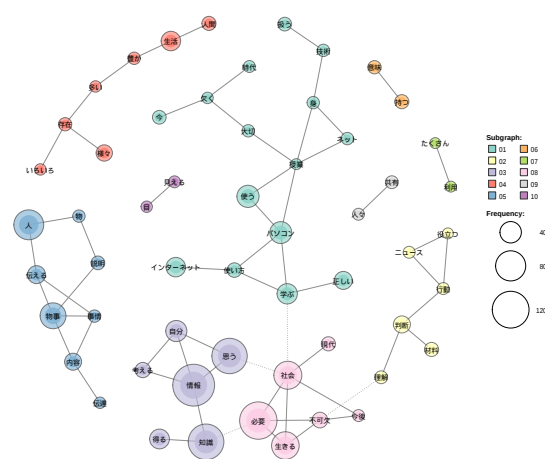


(b) 2025 年度

図 1: 「情報」とは何か (ワードクラウド)



(a) 2024 年度



(b) 2025 年度

図 2: 「情報」とは何か (共起ネットワーク)

識」といった類義語や「必要」「物事」といった位置づけに関する語句は両方に共通して頻出している一方、「社会」「自分」といった関わりに関する単語は 2024 年度に多く、2025 年度ではあまり目立たないこと等が観察できる。

また、共起ネットワークを生成した結果を図 2 に示す。2024 年度回答からは 5 個のサブグラフが見出され、2025 年度回答からは 10 個のサブグラフが見出された。パソコンやインターネットの使い方に関する語句はいずれの年度にも見られ、さまざまな単語と共起し合って大きめのクラスターを形成している (いずれの年度も青緑色の Subgraph 01)。人との情報伝達といった側面も、同様に両年度で見られた (いずれの年度も青色の Subgraph 05)。現代社会を生きる上で必要不可欠という視点も共通している (2024 年度は朱色の Subgraph 04、2025 年度はピンク色の Subgraph 08)。

一方、2024 年度は情報と知識・データとの関わり (クリーム色の Subgraph 02) が見られるのに対し、

2025 年度は知識との関わりが強く、データとの共起は浮かび上がらなかった (紫色の Subgraph 03)。共起関係が少ないサブグラフが多いのも、2025 年度の特徴といえる。

2024 年度と 2025 年度の結果を比較すると、細かな部分で違いは見出せるものの、大きな変容は確認できない。両年度の回答結果は、全体的な傾向としてはおおむね似通ったものであると考えられる。

3.3 情報の授業で学んだこと

大学新入生に対し、「高校での情報の授業で、あなたはどのようなことを学びましたか。」という問いかけに自由記述で回答してもらったものをテキストマイニングした結果を示す。回答は前節と同様に、ワードクラウドと共起ネットワークによる可視化を行った。それぞれの分析手法は前節と同様である。

ワードクラウドを作成したところ、図 3 が得られた。いずれの年度も「使い方」が最頻出語となっており、知識・技能面の学習が多かったことが推察される。また、Word や Excel 等のオフィススイートに関する記

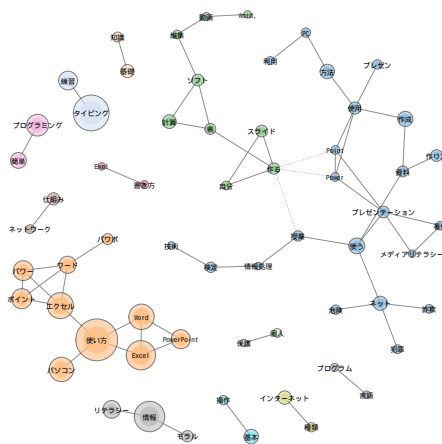


(a) 2024 年度

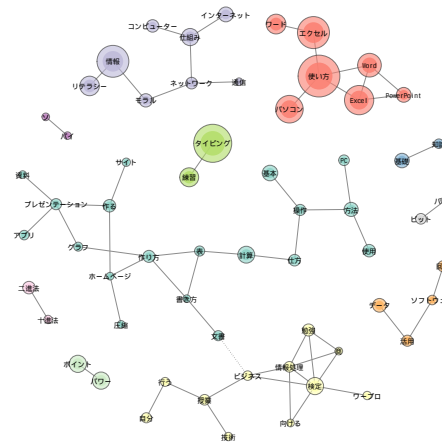


(b) 2025 年度

図 3: 情報科で学んだこと (ワードクラウド)



(a) 2024 年度



(b) 2025 年度

図 4: 情報科で学んだこと (共起ネットワーク)

述も、両年度に共通している。「情報リテラシー」や「ネットリテラシー」といった、リテラシーに関する回答も両年度ともに一定数ずつ見られる。一方、2024 年度で頻出だった「タイピング」は、2025 年度は相対的に少なくなり、代わりに「プログラミング」が頻出となっている。

また、共起ネットワークを生成した結果を図 4 に示す。2024 年度回答からは 13 個のサブグラフが見出され、2025 年度回答からは 11 個のサブグラフが見出された。いずれの年度もオフィススイートの使い方に関するクラスターが見出された (2024 年度はオレンジ色の Subgraph 12、2025 年度は朱色の Subgraph 04)。また、プレゼンテーションに関する記述と操作方法に関する記述は、いくつかの単語を介しながら同じクラスターに同居している (2024 年度は青色、2025 年度は青緑色のいずれも Subgraph 01)。

一方、2025 年度のワードクラウドで頻出だった「プログラミング」は、共起ネットワークでは見られない。これは「プログラミング」という単語が他の単語と共

起せず、ほぼ単独で頻出したことを示唆している。

4 考察

4.1 情報概念の捉え方に関する考察

「情報」に対するイメージの回答結果からは、パソコンやインターネットの使い方をはじめとする ICT 活用に関する記述も見られたものの、全体的な傾向としてはそれだけに限定することなく、情報を現代社会を生きる上で必要不可欠なものと捉えて、ものごとを理解したりコミュニケーションをとったりするためのものとして意識していることが明らかになった。これは 2024 年度・2025 年度いずれの回答からも共通して見出されており、情報概念の捉え方については年度による大きな差異は見られなかった。大学新入生にとっての「情報」とは、ICT との関わりを持ちつつも、それだけに留まらない広い概念として意識されていることが読み取れる。

そもそも「情報」の定義は学術的にも曖昧であり、情報科の教科書でも十分に扱われているとは言い難い。

筆者は旧課程の教科書と新課程の教科書をそれぞれ対象として、教科書における「情報」の定義を調査している。旧課程の教科書を対象とした調査 [6] では定義を掲載していないものが多く、新課程の教科書を対象とした調査 [7] では定義の記載は増えたものの、その内容は「知らせ・様子」「判断材料」「整理・意味価値」に分類されて教科書ごとに異なる定義であったことが明らかになっている。こうした中で、本稿で分析したアンケート回答結果においても、情報に対するさまざまなイメージが表出したことは自然な結果であると考えられる。

情報概念の捉え方について、年度による差異が見られなかったことについては、2つの仮説が考えられる。ひとつは、情報科の学習内容にかかわらず、大学新入生はすでに情報について一定の理解を持っているというものであり、もうひとつは、高等学校の新旧課程において、情報とは何であるかについての学習は大きく変容していないというものである。なお、これらの仮説は排反ではなく、両方とも真ということも考えられる。

いずれにせよ、これらの仮説を明らかにするためには、大学新入生一人ひとりに対してインタビュー等の詳細な調査を実施することが必要になるだろう。本研究ではそのような調査を行っていないため、これらの仮説を確認することはできない。しかし、大学新入生における情報概念の捉え方が、学習指導要領改訂に伴う教育課程の変化の影響をほとんど受けていないということは確認できた。

なお、いずれの年度においても、回答に AI（人工知能）やビッグデータといった、いわゆる最近のキーワードはほとんど見られなかった。一つひとつの回答を確認すれば皆無というわけではないものの、テキストマイニングの結果として浮上するほどの記述量ではない。「情報」と聞いて AI 等が想起されないのか、あるいは想起してもアンケートへの回答として不要な語句と解釈されたのか、その真意は不明であるものの、情報と密接にかかわる最近のキーワードが見られないのは興味深い状況である。今後の社会においては AI 等がますます普及することが考えられるが、そうした社会の変化によって本問の回答が変化するかについては、本稿で扱った 2 年分の回答だけでは判断できない。今後の継続的な研究の中で検討していきたい。

4.2 情報科で学んだ内容に関する考察

情報科で学んだ内容を回答してもらった結果からは、年度ごとの差異が認められた。2024 年度回答は単

語として「タイピング」が頻出しており、多くの学校でタイピング練習が重要視されていたことが伺える。ところが 2025 年度回答では、「タイピング」は相対的に数を減らし、「プログラミング」が頻出語として登場した。2024 年度回答にも「プログラミング」は見出せるが、全体に占める割合は 2025 年度回答において急激に増大している。

この変化は、学習指導要領改訂による影響を受けていると考えられる。旧課程における共通教科情報科は「社会と情報」「情報の科学」の 2 科目から選択必修であり、開設状況は「社会と情報」が約 8 割、「情報の科学」が約 2 割であった [8]。文部科学省の調査では、アルゴリズムやプログラミング等は「社会と情報」では指導されている割合が相対的に低く、「情報の科学」では指導されている割合が相対的に高いことが明らかになっている [9]。すなわち、旧課程の学習者は、その多くがプログラミングを学んでいない。一方で新課程では、必修教科が「情報 I」に総合され、学習内容としてプログラミングが明確に含まれることになった。大学入学共通テストで「情報」が出題される際もプログラミングが含まれることは自明であり、教科書でプログラミングがどのように扱われているかを共通テスト試作問題と比較しながら検討するような研究 [10] もなされた。こうした流れを受けて、新課程の学習者がプログラミングを強く意識していたことが本調査から明らかになった。

内容に関してはすべてが変化したわけではなく、両年度で共通する部分も見出せる。その中で特徴的なのが、Word や Excel 等のオフィススイートに関する記述、ならびにそれらと共起した「使い方」というキーワードの頻出である。端的に言えば、アンケート回答者の多くは情報科の学びにおいて、オフィススイートの使い方を学んだと認識している。しかしながらこれは、情報科で学ぶべき情報教育の本質とは言い難い。

情報教育は情報活用能力を育成するための教育であり、コンピュータ教育ではない。情報活用能力は「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の三観点 [11] で構成されるが、オフィススイートの使い方はこれらの能力を支える手段であり、その熟達そのものが目標になるわけではない。こうした危惧は旧課程よりさらに前の教育課程の頃、すなわち情報科新設時から言われ続けているが [12]、それから二度の改訂を経てもなお、情報教育の本質が学習者まで届いていないという実態が明らかになった。

確かに、Word や Excel といったソフトウェアの熟

達は、高等学校卒業後の大学や就職先等で必須スキルともいえる。だが、だからといってそれを情報科が担っているのは情報科の本来の学びを行う時間が失われてしまう。この問題は本稿の主眼ではないので深入りしないが、別途検討しなければならない課題といえる。

4.3 情報科の学習に対する意識に関する考察

前項の考察で明らかになったとおり、情報科の学習者は情報科の教育内容として本質とかけ離れたイメージを持っている。この点に関連して、学習者はそもそも情報科の学び自体に十分な興味を持っていないのではないかと考えられる。

アンケート調査において、高等学校で履修した情報科目を質問した。その結果、履修したが科目名を覚えていないという選択肢を設置した 2025 年度調査では、15.4% にあたる 116 名がこの選択肢を選んだ。2024 年度調査ではこの選択肢を用意していなかったが、自由記述で科目名を覚えていないと回答する回答者が一定数おり、科目名を覚えていない回答者が 2025 年度同様に存在するという実態が浮き彫りになった。科目名は教科書の表紙にも書かれており、履修年度においてはほぼ毎週眺めていたはずである。アンケートでは「情報 I」をはじめとする代表的な科目名は選択肢として列挙しているため、少々うろ覚えであっても選択肢を眺めれば自分が学んだ科目名を思い出せるだろうと考えていた。しかし回答結果からは、そうした対応をもってしても思い出さなかった回答者が 1 割以上いたのである。

もちろん、高等学校で情報科を履修してから一定期間が経過しており、回答者はすでに高校生ではなく大学生になっていることから、失念した回答者がいること自体は不思議ではない。しかし、そうした回答が 1 割を超えるという事態は、他教科では考えにくいのではないだろうか。特に 2025 年度新入生は、大学入学共通テストで「情報」が追加され、科目として「情報 I」と旧課程対応科目「旧情報」が出題された^{*8}ことから、自分自身の履修科目名を意識する機会は多かったと思われる。

この状況から推察できることとして、大学新入生は高校時代、情報科の科目名を覚えられない程度の意識で情報科の学習に向き合っていたのではないと思われる。なお、共通テストで出題されることでこうした意識は改善されるかと思われたが、本研究でアンケート

調査を実施した麗澤大学の 2025 年度新入生は、共通テストで「情報」（「情報 I」または「旧情報」）を受験した者が 13.7% しかおらず、情報入試の影響は軽微であったことが考えられる [14]。今後、大学入学共通テストでの「情報」受験者の割合が増加すれば、この状況は変化する可能性があるが、それを確認するためには継続的な調査による経年変化の分析が必要となるため、今後の課題としたい。

5 おわりに

本稿では、高等学校学習指導要領改訂による情報教育の変化を明らかにするため、2024 年度と 2025 年度の大学新入生を対象としたアンケート調査を実施し、回答者の情報教育に対する意識が変化したかどうかを考察した。調査の結果、情報概念の捉え方については年度ごとの大きな違いはなく、教育課程の違いによる影響は見られなかった。一方で、情報科で学んだ内容は「タイピング」が多くを占めた 2024 年度回答に対し、2025 年度回答では「プログラミング」の存在感が増した。しかし両年度ともオフィススイートの使い方に偏った回答が多くみられ、学習指導要領改訂後もスキル習得を中心とした授業が多く行なわれていることが示唆された。また、回答者の 1 割以上が履修した科目名を覚えていなかったことから、情報科の授業に対する意識はいずれの年度も低く、今後の改善の必要性が示唆された。

2018（平成 30）年の高等学校学習指導要領改訂とそれに伴う大学入学共通テストでの「情報」出題は、高等学校における情報教育を大きく変革するものとして期待された。しかし本研究における調査結果からは、学習者の実態が大きく変容したということは見取ることができず、むしろ教育課程が変化しても、旧態依然としたスキル中心の指導が行われ、学習者の情報科の学びに対する意識も低いことが示唆された。

今後の高等学校における情報教育を推進するためには、まずは情報科で学ぶことに対するモチベーションの向上が必要であると考えられる。情報教育の核となる情報科の学びに意欲を持って取り組むことができれば、情報に関する意識の変容が期待できる。また、そうした変容を促すためには、授業における学習内容が単なるスキル学習ではなく、情報教育の本質すなわち情報活用能力の育成を意識したものでなければならない。

本稿はあくまでもアンケート調査結果の分析であるため、これらの結果を元にどのような実践が求められ

^{*8} 新課程履修者は「情報 I」しか選択できないが、旧課程履修者は「情報 I」または「旧情報」から 1 科目選択できる [13]。

るかについては、稿を改めて検討することとしたい。社会の情報化がますます進展し、AI やビッグデータが存在感を増大し続けている現代そして未来を生きる人材育成のため、新課程における高等学校情報科がどのような姿であるべきか、引き続き検討していく。

謝辞

アンケート調査の実施にご協力いただいた教員各位、ならびに、回答にご協力いただいた学生のみなさまに感謝いたします。

本研究は、JSPS 科研費 JP21K02864 ならびに JP25K06475 の助成を受けたものである。

参考文献

- [1] 文部科学省、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）、東山書房、2018 年 [2019 年出版]。
- [2] 文部科学省、高等学校学習指導要領：平成 21 年 3 月告示、東山書房、2009 年。
- [3] 澤田大祐、高等学校における情報科教育の現状、調査と情報—ISSUE BRIEF—、No. 1095, pp. 0–12、2020 年。
- [4] 大学入試センター、令和 7 年度大学入学共通テスト実施結果の概要、<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?d=733&f=abm00005261.pdf> (2025-09-22 閲覧)。
- [5] 中園長新、ICT 活用と情報教育に対する大学新生の意識と実態、大学 ICT 推進協議会 (AXIES) 2024 年度年次大会論文集、pp. 63–70、2024 年。
- [6] 中園長新、共通教科「情報」教科書における情報の定義、日本教育工学会第 28 回全国大会講演論文集、pp. 515–516、2012 年。
- [7] 中園長新、高等学校情報科教科書における「情報」の定義：2023 年度調査、情報処理学会第 86 回全国大会、pp. 4-359–4-360、2024 年。
- [8] 中野由章、高等学校共通教科情報科の変遷と課題、情報処理、Vol. 59, No. 10, p. 933、2018 年。
- [9] 文部科学省、生涯学習施策に関する調査研究（高等学校情報科担当教員の現況等に関する調査研究）、https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/chousa/1405417.htm (2025-09-22 閲覧)。
- [10] 井手広康、情報 I の教科書におけるプログラミング分野の比較と考察、情報処理学会論文誌 教育とコンピュータ、Vol. 8, No. 3, pp. 8–18、2022 年。
- [11] 文部科学省、高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説 情報編、開隆堂、2018 年 [2019 年出版]。

- [12] 久野靖、高校教科「情報」のこれまでとこれから（前）、情報処理、Vol. 52, No. 4・5, pp. 559–562、2011 年。
- [13] 大学入試センター、令和 7 年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト「旧教育課程による出題科目」の出題方法等、<https://www.dnc.ac.jp/albums/abm.php?d=733&f=abm00003585.pdf> (2025-09-22 閲覧)。
- [14] 中園長新、高等学校情報科での学びに関する調査結果と考察：麗澤大学 2025 年度新入生を対象とした調査、情報処理学会研究報告 コンピュータと教育 (CE)、Vol. 2025-CE-180, No. 9, pp. 1-10、2025 年。